

人づくりこそが、 島づくりへとつながる

おき どうぜん
隠岐島前



奥田 麻依子 (おくだ まいこ)

岡山県倉敷市出身。京都大学教育学部を卒業後、東京のIT関連企業で勤務。平成24年4月、教育の活性化による地域活性化のモデルづくりを志し、地域おこし協力隊として海士町に移住。



全国各地からヒトツナギに参加した中高生たち。

◆「島が学校、地域が先生」に共感

東京のIT企業から島根県の地域おこし協力隊、しかも隠岐諸島の島前どうぜん地域への移住ということで周囲には大変驚かれました。しかし自分の中では、これまでの経験と、教育を通じて地域の活性化に関わることに、十分につながりがあると思っています。

大学時代に行った環境学習施設でのインターンシップでは、小学生に環境問題を伝える中で、持続可能な社会づくりを子どもたちと一緒に考える面白さを感じました。教員免許を取得しながらも、すぐに教員採用試験を受けるのではなく、一般企業に就職した理由にも、子どもたちが将来羽ばたいていく社会のことを知った上で、一人ひとりの視野を広げ、可能性を拓いていけるような教育者になりたいと考えたからです。

東京で働き始めてからも、街を大学のキャンパスに見立て、学びの機会を提供するNPO法人の活動に参加する中で、地域における学びにますます関心が高まりました。会社の業務でも、中高生対象の出前授業や会社見学を担当する中で、教育への想いが抑えきれなくなってきたタイミングで、「島前高校魅力化プロジェクト」の取り組みを知りました。

「島全体が『学校』、地域の方が『先生』」というコンセプト



生徒たちの企画で全国の中高生との交流を行う「ヒトツナギ」。

◆地域に学び、つながりをつくる

トに共感し、またここでの取り組みから日本を、さらには世界を変えていくのだという高い志に惹かれました。課題先進地域ということで、高校生にとつての学びの題材があふれており、島という小規模なコミュニティだからこそ、地域とつながりながら、リアルな実践の場を持てるということも、教育を行う上でとても魅力に映りました。そして、何より人づくりが島づくりにつながっていくという島前地域の皆さんの熱い想いに触れる中で、ここで島の未来を担う子どもたちと一緒に育てたいという想いが強くなってきました。

現在は、隠岐島前地域唯一の高校である島根県立隠岐島

前高等学校を起点に、地元三町村（海士町、西ノ島町、知夫村）、

学校、地域住民、各種団体などを巻き込んだ地域総がかりの教育改革と持続可能な地域づくりに挑戦しています。グローバル人材の育成を目標に掲げ、地域の実情を学び、少子化や高齢化といった地域の課題解決に実際に取り組む

「地域学」、地域と世界のつながりを考え、地域で実践する「地域地球学」といったプロジェクト学習型の授業の展開や、地域の最前線で働く方や国内外の専門家との対話を重視した新たなキャリア教育「夢探究」（総合的な学習の時間）を高校の先生方と一緒に推進しています。たとえば島に来た一年目の「地域学」では、西ノ島にある旧・美田小学校（平成二三年三月廃校）で高校生が地域の方々の活動と一緒に参加させていたただきながら、自分たちにできることを模索しました。その結果、地域の方々为本をテーマにしたイベントを開くのと同時に、より若い世代（小学生）が参加できるイベントを企画し、共催させていただきました。地域の方々からは、高校生が活動に参加することで活気が出るとともに、新たな視点での意見がもたらえて刺激になるというありがたいお言葉をいただきました。

また、部活動で

も、島前で過ごす四泊五日間のプランを通して、全国の中高生に人とのつながりを感じてもらおう「ヒトツナギ部（第一回「観光甲子園」にてグラン



島根半島の北東約60km、隠岐諸島南西部にある3島からなる地域。中ノ島の海士町、西ノ島の西ノ島町、知夫里島の知夫村からなる。



廃校イベントでは、巨大シャボン玉飛ばしが行われた。

よう努めているところです。こういった特色ある教育活動の効果もあり、一時は廃校の危機に瀕していた島前高校が、現在は東京や京都、東北、ドバイといった島外からも多様な生徒が集まる学校に生まれ変わり、島への教育移住も増えてきています。

◆仕事と日常の融合にとまどいど心地よさ

前職が比較的平均年齢の若い会社だったこともあり、子どもから年配の方まで幅広い年代の方と一緒に仕事をするという経験は、多様な価値観に触れることが面白い一方で、

プリを受賞した観光プランを
実現化している）、「地域国
際交流部」（生徒の興味や特
技を生かして地域で活動した
り、国際交流を企画している）
という地域とのつながり
の深い活動に携わってい
ます。生徒と一緒に地域
の中で活動させてもらい
ながら、地域のことを学
び、地域の方とのつなが
りをつくりながら、それ
がまた生徒に還元される

まだまだ自分自身が成長しなければならぬと感じることが多々あります。都会の仕事では効率性や論理が重視されていた部分も多かったのですが、島での仕事ではそれだけでは割り切れない部分もあると感じています。また、都会では公私の区別がはっきりと存在し、平日と土日が完全に区切られた生活をしていたので、島に来た当初は（ある程度の覚悟はしていたものの）どこにいても生徒や仕事で世話話になっていく方に会うことに戸惑ったこともありましたが、いまでは仕事での関係性が日常生活にも還元されたり、逆に日常生活でのつながりが仕事にも活きてきたりと、いい形で公私が融合している

ことに心地よさを感じることが
なってきました。



生徒がそれぞれの興味をもとに夢を探索する授業。



今年6月、安倍首相と地域おこし協力隊の意見交換会にて(右から二人目が筆者)。

受け入れ側からみた隊員の活動

●島の現状

隠岐島前にある島根県立隠岐島前高等学校（以下、島前高校）は、少子高齢化の影響を受けて生徒数が減少し、廃校寸前の危機に陥っていた。島から高校がなくなれば、高校生の世代が進学にともない島を出ていくことはもちろん、島から子どもを外の高校へ通わせる経済的負担から、その親世代も一緒に出ていくことが懸念された。また、教育環境が整っていない状況では、定住促進に力を入れても、子連れの若い世代のUターンは期待できない。そのような状況の中で、危機を好機に変えるべく島前三町村が連携し、「島前高校魅力化プロジェクト」が発足した。

「仕事がないから帰れない」のではなく、「仕事をつくりに帰りたい」と思うような地域の未来をつくる若者たちを育てたいと「地域創造コース」を設置。課題先進地域である離島という環境を活かして、島を舞台に地域の課題解決に取り組む授業「地域学」など特色あるカリキュラムを展開した。また、子どもの数が少ないことで人間関係が固定化されやすく、価値観も広がりにくいといった島の教育環境の課題を解決すべく「島留学」という形で、全国からの意欲ある高校生の受け入れを実施。現在は、生徒の4割強が島外から入学した生徒になっている。これらの施策の中心となって、学校と地域の活性化を高校内部から進めているのが奥田さんである。

●隊員の活躍

仕事が極めて早く、きめ細かく対応してくれており、地域の方々や先生方からの信頼も厚い。授業や部活動などを通して、地域へ積極的に出る生徒たちが増えたことで、地域に活気が出たという声も上がっている。こういった高校生の活動が、海士町だけでなく、西ノ島町、知夫村にも広がったことで、地域住民からの高校に対する評価にもよい影響をもたらしている。そして、なにより、ものごとくに真剣に取り組む姿勢と柔らかく人なつっこい笑顔が島の人を元気にしてくれている。

●これからへ向けて

企業でキャリアを積んだ人材が地域に入ることで、地域の取り組みは大きく飛躍していく。しかし企業を辞めて来るというのは、本人にとってのリスクも大きく、企業側も痛手があり、受け入れ側も地域おこし協力隊としての3年を終えた後のキャリアパスの明示が難しい。そこで、企業を退職せずに、3年程度地域に入ることができる（3年後には企業へ戻れる）制度へさらに充実させてもらいたい。また、この制度を国家公務員にも適用し、中央省庁の方たちにも課題の山積する離島や地方の最前線で住民と一緒に活動できる機会を提供してもらいたい。「デスクワークだけでなく、こうした現場で私も一緒に頑張りたい」という国の方たちの声も多く聴いている。地方の現場経験を積んだ企業や国の方たちが増えることで、真の地方創生が進むと確信している。

（島前高校魅力化プロジェクト 田中伸夫）

◆つながり、新しいつながりを生んでほしい

高校教員ではない立場の私が、授業や部活動に入っている生徒と関わる中で、生徒と地域をつなぐ役割は果たせているのではないかと思っています。私自身が地域の方々を支えられながら仕事をしています。また、こういった地域活性の取り組みはよいと思います。また、こういった地域活性の取り組みは人が動かしている部分が大きく、人の入れ替わりによって勢いを失ってしまうケースも少なくないのではないかと思

います。このプロジェクトに関わる中で、これまで属人的だった地域連携型の授業や部活動の進め方などについて、今後引き続きいくことができる資料整備ができたことは一つの成果といえるかもしれません。取り組みの持続性を担保し、さらなる飛躍をするために、引き継がれるしくみや資料を整備していくことはもちろん、持続的に意欲ある人材が関わり続けられるしくみが必要不可欠であると考えています。将来は、ここで教えた生徒たちがここでの人づくり、島づくりの中核を担ってくれることを楽しみに、日々働いています。